考えウシ

第四十六回『文学部唯野教授』と信派の自由

祖父母も叔母も叔父も
養父母も大好きだから

弦楽器イルカ⇔友人

第四十六回 『文学部唯野教授』と信派の自由〜G から U へ〜

台湾、大丈夫かな。

前回のやり取りで思ったんだけど、俺が今考えてることって、学生時代のUに強い影響を受けてると思う。あの当時Uが話してた遺伝子の話とかを、俺は今なぞってる気がするから。そういう意味では、俺とUの言ってることがあの頃とちょっと逆転してるような気もするんだよね。
たぶんあれからしばらく経って、お互い片側しか見えてなかった世界の裏側も見えるようになったのかもしれないと思った。

小室サウンド好きのUとしては最近の報道に、何か一家言があるのかもしれないと思うけど、俺は盛者必衰とだけ思った。善悪ではなく、ただ自分を戒める意味でね。
単に可哀想って話に俺はならなかった。バブル時代に桁違いの豪遊してたワケだし、小室サウンドに特別な思い入れないし。とにかく盛者必衰って肝に銘じたよ。

あと、不倫は当事者の問題だと思うし、身内でもない芸能人の話題で騒ぐ一般人もバカバカしいと思って来た。
でも最近気づいたのは、俺だって子供の頃はテレビに夢中で、夢でいいともに出たり芸能人が隣の席にいたりしたから、当時は芸能人に対して俺も当事者だったんだよ。
アイドル商法だって、ファンがアイドルに対して当事者意識を持つから金をつぎ込むワケで、みんなが他人事で無関心だったら商売が成り立たない。
つまりテレビで熱中して金を落とす層にとって、芸能人は身内と一緒だから騒ぐんだよ。それが有名税ってヤツでもあるし。

ただね、21世紀は合意と妥協の世紀だよ。自分と他者との決定的な違いを認識し、かつ歩み寄るのが21世紀的だ。互いの信教の自由を侵すのはフェアじゃないと認識するべきだ。
例えば不倫でも、商売や暇つぶしのために争いが起こってるけど、要は「不倫くらいする派」と、「不倫は許せない派」がいると認めればいいだけだ。
あるいはセクハラでも、異性間だけでなく同性同士で争うより前に、「他者からのセクシャルな言動に嫌悪派」と「寛容派」がいると認めたうえで、嫌悪派はセクハラ被害を訴えればいいし、寛容派はセクハラを受け流せばいい。もちろん他にも、「性的な事柄には口を慎むのが美徳派」や、「相手が富豪や美形だったらセクハラされても良い派」だっているかもしれない。
信教の自由と同じで「信派」の自由を認めることと、自分が何派で、他にどんな派閥があるのか、各々が認識すればいいだけだ。そっから先は宗教戦争と一緒で、他人を変えようとしても簡単に人は変わらないし、信派の押し付け合いには害しかない。
ただし、犯罪につながるハラスメントはもちろん厳重に処罰されるべきだろう。

　この文脈で考えるとわかるんだけど、最近話題のおかあさんの歌について、「感動して泣く派」と「怒る派」がいるけど、疲れてるお母さん同士で争うのは有害だ。
　感覚ではなくもっと論理的に、どの言葉が誰の感動を呼び、どの言葉が誰の怒りを買うのか、学問的にフェアな答えを出すべきだ。
　言うなればあの頃Uと笑い合った『文学部唯野教授』「一杯のかけそば分析」的なアプローチが今こそ必要じゃないかと思う。

「
　母親でなくても、女性でなくても、この歌で涙するほど感動した人は、精神的に相当追い詰められている人です。つまり虐待の芽を認識するリトマス試験紙という意味では、非常に優れた歌と言えます。
「あたしおかあさんだから　こんなに怒れるの」という歌詞に違和感を持たない人は、親であれば子供をいくらでも怒れる権利を有している、という考えの人です。怒れる権利がある理由としてこの歌は、「親は子供のために我慢しているから怒れる」と歌っています。
「お母さんだからお母さんだからお母さんだからお母さんだから我慢して我慢して我慢してんだからもっと感謝しなきゃ虐待するぞ！」
　ですが母親が子供を叱るのは、子供が死なないようにするため、そしてより幸福な人生を送れるようにするためです。それが安定した精神状態の人の考え方です。
　しかしこういった病的な構造に気が付かない人は、自分も病的か、でなければ言葉に鈍感で幸福な人です。もちろん幸福であればそれは素晴らしいことだと私は思います。

　更にもう一つの認識としてこの歌詞は、独身の頃は「ヒールはいてネイルして 立派に働けるって強がってた」と断言しています。
「強がる」という言葉は通常、背伸びとか虚勢という意味なので、「本当は立派には働けないが、無理に意地を張って強がって仕事をしていた」と歌っていることになります。
　つまりこの歌は、「自分は正社員のような仕事には向いていないが、子供のための家事やパートならば我慢して頑張れる」という人の歌です。そして、実際にそういう人もたくさんいます。
　ですが働き方改革が叫ばれている昨今は、正社員を辞めないで産休育休を取り、ママとしても働ける社会の実現が目指されています。
「強がる」という言葉を選択した以上、正社員ママとして時短で働くのも立派だとする改革の意識にも逆らっている点と、特に強がらずとも立派に正社員として働いている人を除外している点について、作詞者は認識する必要があります。(ちょうど最近『女子的生活』というドラマで、そんな会話もありました)

　そして最後の認識として、この歌で泣いて感動する人は、たとえば路傍の石に「おかあさんだから」と書かれていても感情移入して泣ける可能性があります。
　なぜならこの歌の最大のポイントは、極端なほどに曲がつまらないという点にあるからです。

ここはもっと真剣に議論されていいはずです。
　そもそもこの曲は、『トイレの神様』に旋律が似ている点も気になりますが、『トイレの神様』は少なくとも私的なエピソードの歌詞であり、共感できるかは別としても、他人を不快にさせる要素の少ない歌です。曲もそれなりに盛り上がるよう工夫されています。

　結論として、これほどなんの工夫もない曲と病的な歌詞にも違和感を持たない人は言葉に鈍感で幸福な人であり、感動する人は虐待との関連性が疑われる人だと自覚する必要があるでしょう。
　我々21世紀人は、この歌に感動する人を自分とは違う他派として受け入れましょう。また、募った怒りで他派を攻撃したくなる人は、この歌に共感できない自分とはどういう人間なのか、感覚ではなく論理的に理解して怒りを鎮める必要があります。でなければあなたも、他者が有する信派の自由を侵すただの無法者です。
　人を呪わば穴二つであることを肝に銘じましょう。
」

　今回はこんな感じ。
　どうかな？

考えるウマシカ～第四十六回 『文学部唯野教授』と信派の自由～

http://p.booklog.jp/book/120258

著者：弦楽器イルカ
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/gengakkiiruka/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/120258

電子書籍プラットフォーム：パブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社トゥ・ディファクト